大切な家族

長生村立長生中学校　一年　松原　蒼天

「大事な話がある。」
小学二年生のある日、
「お母さんが、すい臓がんになった。」
と、父から聞きました。「がんなんてきっと、風邪みたいにすぐに治るだろう。」そのときはそう思っていました。でも、簡単には治らないこと、治すには抗がん剤をたくさん投与しなければならないこと。それがわかったとき、幼かった僕は、不安な気持ちでいっぱいになりました。

長生村に引っ越したあと、病院が少し遠くなりましたが、それでも、一ヵ月に二、三回は病院に通っていました。

やがて、母はあまり歩けなくなりました。僕は、母の体調がだんだんと悪くなっていることに気づいていました。「どうしよう……。お母さん、お母さん……。」母が、自宅で治療をするようになってから、僕には口に出せなかったことがありました。「お母さん、もう少しで死んじゃうのかな……。」

五年生になった二月三日。三時間目。授業を受けていると、いきなり父に呼ばれました。
「お母さんの前では、泣くなよ。」
父からそう言われ、僕は、車の中で泣きました。

家に帰ると、母の様子が朝とは違っていました。僕は、母に元気を出してもらおうと一生懸命声をかけました。母はもう何も喋れませんでした。僕は、母の近くで、看護師さんと母との思い出話をしました。思いつくかぎり。たくさん。父と兄が帰ってきたとき、母は、亡くなってしまいました。家族を一人亡くし、僕は、めちゃくちゃ泣きました。十一時十五分でした。

母が亡くなった後、十一時十五分をさした時計が偶然目に入る度に、「お母さん。何もできなくてごめんなさい。」と涙があふれそうになりました。また、月命日の

三日を迎えると、感謝の気持ちを直接母に伝えたくなって、悲しくなりました。がんの話を聞いたとき。家族の話を聞いたとき。何度も何度も胸が締めつけられるように苦しくなりました。

中学に入って、クラス全員で作文を書くことになりました。僕は初めて、母のことを書いてみようと思いました。僕は、文章を書くことが苦手でしたが、なぜかスラスラと言葉が出てきました。

作文発表が終わったあと、不思議と心が軽くなったことに気が付きました。これまでフタをしてきた思いを文章にし、気持ちの整理ができたのかもしれません。

「あんなに真面目な蒼天は初めてみた。僕も家族を大事にしようと本気で思う。」

友達からは、こう言われました。今まで、人からふれられることがなかった話題。当然、自分から口に出すことも避けていました。でも、言葉に表したことで、あのとき自分がどう感じていたのか、何が苦しかったのか、少しだけわかったような気がしました。そしてこの話を聞いて、「家族を大切にしたい。」と思える人が一人でも多く増えるなら、僕が感じた思いをできるだけ多くの人に伝えていきたいと思いました。言葉を使うのは、僕もあまり得意ではありません。しかし、心の中にある思いを「言葉」にすることで、何かが変わるのかもしれないと、今は思っています。

家族との会話。いつもの食卓。何気なく過ぎていく毎日は、皆さんが思っている以上に幸せなことです。今、僕の話を最後まで聞いてくださった皆さん。目の前にいる大切な家族とたくさん話をしてください。そして、恥ずかしがらずに感謝の気持ちをつたえてください。伝えられるときに。自分の「言葉」で。当たり前の時間が、いつか大切な思い出となるように。